

1 はじめに

ふるさと学習部会では、昨年度から、「ふるさと学習」の教材となり得る地域教材の情報収集とその教材化に取り組んできました。

今年度は、渡良瀬遊水地と地域の祭りの調査に取り組み、渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団主催の子ども向けの夏休み講座の見学や百八灯流し（栃木地区）、鷲宮神社（都賀地区）の見学を行いました。ふるさと学習における小学校・中学校の連携も視野に入れ、渡良瀬遊水地を教材とした栃木南中学校と部屋小学校のそれぞれの事例を紹介します。また、社会科や総合的な学習の時間等で、教材として活用できる地域の祭りや祭りにまつわる郷土料理を紹介します。今後の授業実践のお役に立てば幸いです。

2 事業内容の紹介

(1) 栃木市の祭り

① 栃木百八灯流し（栃木地区）

栃木市の無形民俗文化財に指定された『百八灯流し』は日光修験行事の「船禅頂」になぞらえ、明治初頭に御大院の星覚全という修験者が始めたものだそうだ。

巴波川の舟運の安全祈願と百八の煩惱を水に流すための仏教行事であり、白装束姿の船頭が漕ぐ御神船が巴波川に浮かび、舟の端に108本のろうそくが灯される。揺れるろうそくの炎と法螺と雅楽の音が作り出す情景は幻想的である。

この行事は、百八の煩惱を水に流すといういわれや、108本のろうそくは安産のお守りになるといういわれをもっている。火の消えたろうそくは安産のお守りとされ、両岸にいる見物人に投げ入れられる。



② 「木の杖術」木八幡宮秋季大祭（都賀地区）

栃木市都賀町木地区に鎮座する木八幡宮で10月に秋季大祭がおこなわれ、伝承の杖術が披露される。境内に相撲の土俵方の舞庭が設けられ、すべての演技はここで行われる。当地の杖術は流名を小天狗流杖術といい、寛永13年（1636年）に当地の農民たちが日光東照宮で演技奉納を行ったという口碑伝承がある他は、由来など詳細な沿革は不明である。昭和55年に開催された「栃の葉国体」において、地元保存会と都賀中学校の協力で「杖術体操」として公開された。小天狗流には表裏24手計48手の演目があり、演技内容は、杖対杖、剣対杖



の攻防で素朴で野趣あふれる芸風が特徴である。当地の演技で使用する杖は、一般の杖術で使用するものよりは少々長く、実際の所は棒術に近い感がある。演目によっては歌謡のような節回しで掛け声を発する箇所もあり、組太刀というよりは舞踊のような印象を受ける演技もある。杖術の他、囃子の調べに乗せ、そろいの足踏みも軽やかな獅子舞も披露されている。

③ 「強卵式」 鷲宮神社（都賀地区）

家中の総鎮守として、また、お酉様として親しまれている鷲宮神社の祭り。11月23日の例大祭に行われる、お酉様ならではの儀式。山と盛られた生卵を、天狗に「食べる。」と責められるが、「お酉様である鷲宮神社の習わしに従って神様にお供えいたします。」と言って辞退する。その心掛けに満足した天狗たちは、氏子崇敬者の息災を誓い、神様の元に帰って行く。

鷲宮神社は808年創建。強卵式は、鳥を大切にするために2001年（平成13年）から始まった。



④ 「どんど焼き」（大平地区）

どんど焼き（左義長・さぎちょう）は地方によって呼び名が異なるが日本全国に見られる風習である。竹やわら、杉などで小屋ややぐらを作り、正月飾りや書き初めを一緒に燃やし、繭玉団子あるいは餅を焼いて食べる。起源は諸説あるが、平安時代の宮中行事で正月遊びとして「毬杖（ぎっちょう）」と言う杖で毬をホッケーのように打ち合う遊びがあり、小正月（1月15日）に宮中で青竹を束ねて立て毬杖3本を結び、その上に扇子や短冊などを添えて、陰陽師が謡いはやしながらか焼いてその年の吉凶を占う行事「三毬杖」が始まりではないかという説が有力なものとしてある。どんど焼きを別名「左義長（さぎちょう）」と呼ぶことの由来でもある。「どんど焼きで焼いた団子を食べると虫歯にならない。」「どんどの火に当たると無病息災で過ごすことができる。」「書き初めが神火で高く上がると、習字がますます上手になる。」などの言い習わしがある。

大平地区の西野田では、育成会を中心としたしめ縄作りから始まり、やぐらの木の切り出し、ご神火送り、どんど焼きと、100人を超える子供たちが参加する大きな行事になっている。



(2) 行事にまつわる郷土料理

① しもつかれ (初午)

しもつかれは、栃木県を代表する郷土料理で、旧暦の2月初午（はつうま）という特定の行事と結びつけた食べ物である。現在は栃木県を中心とした北関東一帯と福島県の南西部に残っている。しもつかれは、「下野ばかり」あるいは「下野家例」がなまったものと言われる説がある。土地により、「しみつかり」、「しみつかれ」、「すみつかれ」などと呼ぶこともある。語源は、「しみつか



る」つまり「味がしみこんだ料理」、「冷たい料理」から来ていると考えられている。また、2月の初午と強く結びついた料理で、「初午前には作るな。」とか「二の午に作る際には、初午に作ったしもつかれを少し残しておき、それを種として作るものだ。」という言い伝えもある。

江戸時代中期、天明の飢饉の頃（1782～1787）、稲荷神社に供えたのが始まりと伝えられている。冷蔵庫もなければ、促成栽培といった野菜の栽培法も未発達な時代で、2月の初午の頃は、最も食料が乏しくなる頃で、稲荷神社の祭りである初午とはいえ、生きのよいごちそうを作るのが困難であった。そこで、考え出されたのが残り物を巧みに利用したしもつかれであるとされている。稲荷神社への供物としての価値を高め、初午以外に作ることを禁ずる考えもあった。

しもつかれを「7軒食べ歩くと中風にならない。」という言い伝えもある。

② えび大根

えび大根は、渡良瀬川流域の地域で、9月28日、29日の水神様のお祭りに、赤飯、けんちん汁、きんぴらごぼう等とともに作られていた。水神様の祭りは、渡良瀬川を利用する舟の安全や川の穏やかなることを祈願した。その日には親戚や家を出ている子ども達が帰ってきて共にお祝いをしたそうである。元来、行事やハレの日のご馳走であったが、現在では、寒くなると川えびが獲れることと大根の味が良くなることから、県南地方では一般家庭でも普段の日のおかずとしてよく作られている。

えび大根に使われるえびは、笹を使って取ることから「笹えび」と言われる川えびである。笹えびと皮をむいて厚めに切った大根、それに水、玉砂糖、しょうゆを加えて大根がやわらかくなるまで弱火でゆっくり煮た料理がえび大根である。良く煮えた大根は、口の中ですくるとろけるようにおいしくなる。

寒くなると川や沼の岸辺の草が枯れ、えびが寒さをしのぐ場所がなくなってくる。その草のかわりに笹を束ねて縄で縛り、縄の端を1mくらい付けて岸辺に固定し、川や沼に入れておくとえびが笹に身をよせる。その笹の下に三角網を差し入れて、えびをすくって捕るのである。



(3) 「渡良瀬遊水地」を教材とした学習の実践事例

① 中学校「社会科【歴史的分野】」実践事例 … 栃木南中学校

I：教科書「新しい社会 歴史」（東京書籍）では、明治時代に産業が発展する一方で公害問題が発生したことの具体例として「足尾銅山と田中正造」が取りあげられ、社会問題となった鉱毒問題や問題解決への取り組みについて理解する学習が設けられている。ここでは、鉱毒問題の解決への取り組みについて考えさせる資料の一つとして、渡良瀬遊水地を取り扱うものとする。

II：単元の展開例

導入 「足尾銅山の役割」

当時、日本にとって足尾銅山の存在は重要であり、ヨーロッパへも銅を輸出する、アジアの大きな銅山としての役割を持っていたことに気付かせる。

展開① 「足尾銅山鉱毒事件」

本文や学習資料から、被害の状況や鉱毒事件の原因と影響を調べ、話し合い活動等を通して、自然環境や鉱毒被害の状況を具体的につかませる。

展開② 「足尾銅山と田中正造」

- ・被害にあった地域の人々の気持ちを考え発表し合う中で、地域の人々、田中正造、政府、それぞれの立場について理解させる。
- ・田中正造についての補足説明を受け、生涯をかけて鉱毒問題に取り組んだ田中正造の生き方について考えさせる。
- ・その後の事件の経過と結果について説明を聞く。
 - ★この説明の中で渡良瀬遊水地について取り扱う。
 - ★足尾銅山のその後の様子や鉱毒事件と渡良瀬遊水地の関係について説明する

まとめ 「環境問題」

現在の足尾銅山の様子や渡良瀬遊水地が登録されたラムサール条約についての説明を聞き、鉱毒事件について考えたことや環境問題について思うことを自分の言葉でまとめさせる。

※ 全体を通して、足尾銅山の現在の様子や渡良瀬遊水地の現在の様子を写真資料等を利用してつかませるようにしたい。

② 小学校「総合的な学習の時間」実践事例 … 部屋小学校

I： 本校では、5年生が巴波川についての探究活動を行っている。本校のすぐ南側を流れる巴波川の歴史的な役割や巴波川と人々との関わりについて調べるのが単元の目標であるが、巴波川が流れ込み、ラムサール条約にも登録された渡良瀬遊水地について学習を行うことも、大切なふるさと学習であると考え、単元の学習の一部に組み入れた。巴波川の探究活動を終えた後に、1時間学習を行った。

II： 授業の展開例

導入 「渡良瀬遊水地の役割」

前学年までに、社会科や総合的な学習の時間に学習した、渡良瀬遊水地の役割（治水・鉱毒対策としての役割）について、想起する。

活動① 「渡良瀬遊水地の地理」

地図帳で、渡良瀬遊水地の位置（接する4県の市町）を調べたり、渡良瀬遊水地や谷中湖の面積や外周の長さを予想したりする。

活動② 「渡良瀬遊水地の歴史」

ワークシートを使って、足尾銅山の鉱毒事件や渡良瀬遊水地の造営など、遊水地の歴史について、理解する。

活動③ 「渡良瀬遊水地の自然」

渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団発行の図鑑（植物・昆虫・魚の3種）を用いて、多くの絶滅危惧種や稀少生物が生息していることを理解する。また、ラムサール条約に登録された意義について知る。

振り返り

本時の学習を振り返り、学習してよかったこと、これからの学習や生活に生かしたいことといった視点で感想をまとめ、友達と発表し合う。

3 おわりに

今年度も、昨年度からの継続として、ふるさと学習の教材となり得る地域素材の情報収集とその教材化に取り組みました。昨年度は、「巴波川や日光例幣使街道沿いの地域素材」についての情報収集及び教材化を行いましたので、今年度は新たなテーマとして、「市内に残るお祭り」と、それに関わる郷土料理」及び「渡良瀬遊水地」について、情報収集と教材化を行いました。その活動の一環として、8月に渡良瀬遊水地（藤岡地区）と鷺宮神社（都賀地区）に取材に出かけました。

渡良瀬遊水地では、体験活動センターで行っていた、渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団主催の子ども向けの夏休み講座を参観すると共に、下都賀漁協の方から、谷中湖での漁や捕れた魚介類の調理法について、話を伺いました。また、遊水地内の旧谷中村跡地では、渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団の方に案内していただきながら、フィールドワークを行いました。お二人の話から、渡良瀬遊水地は、今も昔も地域の人々の生活にとって大切な場所であり、人々の喜びや苦労、悲しみが紡がれてきた場所であることを再確認することができました。

鷺宮神社では、毎年11月23日に行っている強卵式について、神主さんから話を伺いました。強卵式は、昔から受け継がれてきた儀式であると勝手に解釈していましたが、平成13年から始めた新しい儀式であることを伺い、大変驚きました。「伝統を受け継ぐためには、意義のある新しいことを行わなければならない。」という神主さんの言葉に深い感銘を受けました。

8月に取材を行ったり、学校でふるさと学習を進めたりしながら感じることは、ふるさとについての理解が深まることにより、ふるさとへの愛着が深まるということです。ふるさとを愛し、次世代にふるさとの素晴らしさを伝えたいと強く願う子どもを育てるためにも、ふるさと学習が各校でより活発に行われることを期待しています。私たちふるさと学習部会の研究が、その一助になれば幸いです。